市長対談

團 伊玖磨さんと語る

ふくらむ、新潟発の夢プラン

新潟の色を生かした市民文化会館を

司会　先生は、オペラ・交響曲・歌曲を手がけていらっしゃいます。そのお立場から、文化について先生のお感じになっていることをお聞かせください。

團　僕は、今までの文化という言葉の定義が狭いと感じています。文化イコール芸術というとらえ方しかなされていない。文化というのは人間活動の全般、宗教もそうだし、それから生活様式、経済、政治も文化だし、人間がよりよく生きていくための手段。だから、文化ということを論じる場合、文化が芸術ということだけに偏ると、間違いが生じる恐れがあります。確かに芸術という文化もあるけれど、上辺だけとらえてもだめ。文化の実体というのは人間にあるわけだから。人間の生活にあるわけです。ですから、文化会館にしても、市民の方がどう生きていくかというところに根があって、そして初めて文化会館で行われるものが生まれてくるべきで、何か文化というのは上の方にあって、それをやるための殿堂というふうに思うべきではありません。だから今までの考え方だと、人間不在の文化会館ができるわけですね。

何となく教養を高めましょうと、その模範をやりましょうと、そういうことだけでは、本当に生活の中に生きない。もっとその地方地方のいろいろな特性をはっきり踏まえた、生きた特色ある文化会館を日本各地に造るべきで、一つの模範をやりましょうということになると、全国にたくさんできてる文化会館が、みんな同じものになってしまう。

人間がつくり、運営し楽しむのが文化

市長　私が思いますに、生活文化もありますし、食文化に、建築文化、いろんなところに文化があります。先生のおっしゃるように、風土性に根差した、その地域に住む人たちが生み出しはぐくんできた生活の知恵というか、文化とはそういう考え方でやってた。それは間違いだった。一つの目的がすでにあって、それにみんなが奉仕するような、人間の方が文化の下にいるんですね。人間がつくり、人間が運営し、人間が楽しむのが文化ですから。そう考えないとね。

「人間の生活そのもの」文化だから

うものを反映したものなんでしょうね。

團　そうですね。僕は長いこと音楽に携わってきた結果、たどり着いたのがそういう考え方です。というのは、音楽でもですね、音楽だけで成り立っているわけじゃなくて、人間の生活があって、音楽がある。これは歌もそうだし、器楽もそうです。ですから、そういう考え方をしていかないと、これからの文化が力強く進んでいかないと思うんですね。

市長　先生は、ススノオという日本神話の時代、まさに日本に土着している思想を取り上げられているわけですが。以前は確か「夕鶴」。あれは佐渡に伝わる民話だと思うんですが、木下順二さんの…。ずいぶん回数を重ねてやっていらっしゃると伺っていますが。

團　「夕鶴」は今で六百五十回ぐらいですか。今年もブラジルなど南米の海外公演をやりますし。音楽作品っていうのは、やっぱり再演を重ねて、繰り返して初めて、血が通ったいって初めて、繰り返して作品に育つんです。私は再演を非常に大事に考えています。

「素戔嗚（スサノオ）」は、日本の泥が生んだ縄文・弥生文化に、真剣に取り組もうと考えてやってきた。そうしたらね、「日本人の体の中で眠っているものを揺さぶるんですよ」とお客さんが興奮しまして。非常にいい出来だと言われて、うれしかったですね。「素戔嗚」も来年の三月、神話が生まれた場所の出雲で、ずれまた会館ができた時、新潟で公演ができればよいと思っています。

市長　ぜひ来ていただきたいです。

まちづくりはみんなの連帯から

私は、今、文化の薫るまちづくりということを言っているんですが、住んでいる人たちが身の周りの環境を豊かに気持ちよくするために、自ら参加をするということが大切なんじゃないかと思います。木や草花を植えてみるとか、家の前を掃除してみるとか、みんながこう連帯してこそ、素晴らしい街並みができるという気持ちがありますね。

團　自発性から生まれてくるものが大切ですね。

市長　先生がおっしゃるように、踊りを踊るならこうしなきゃならないとか、これはどうしなきゃならないとか。そういうのは、上澄みとして確かにあるかもしれないけれど、一般の生活の中では、もっと自由なレベルで、皆さんいろんな文化活動を実際にやってらっしゃるわけなんですよね。

團　例えばあの、雪が降る地方で、冬の間、木をつっておく…そう、雪つり。あいうものの美しさというか技術っていうか、心っていうか。折れないようにという心遣いが生んだ美しさですね。非常にいいもんですね。ああいうところに、新潟に住んでらっしゃる方は意外と気が付かないんじゃないでしょうか。

市長　当たり前だと思うんでしょうね。

團　そういうことに気付いて、今度は木をつるだけじゃなくて、ああしたものの造形が新しい技術の中に生きている建築が、創造されてもいいんじゃないでしょうか。

市長　その地方の風土に根差したものとしてですね。

白山公園と一体となった整備が進められる（仮称）新潟市民文化会館

いいホールあればいい中身が育つ

市長　平成十年には、先生からも設計のコンペで審査していただいた市民文化会館の千九百席のコンサートホールと九百席のシアターと能楽堂が、一つの卵型の建物の中に入る設計です。

團　本当にね、とても新しい、いい試みですね。楽しみに待っています。

市長　コンペにはずいぶんたくさんの応募をいただきました。本当に素晴らしい案を選んでいただきました。このほどようやく着工ということになりました。

團　平成九年、十年、十一年、そのかいわいは、日本が本当の、すごいホールをたくさん持つ時代なんです。

いよいよソフトの時代が幕を開ける感じですね。よく、ソフトがないのに、つまり中身がないのに、ハードつまりホールを建ててどうなるんだという声がありますが、これは間違いなんです。ホールがなければ何も育たない。やっぱり家がなくちゃね。そこで生活するというのと同じことで。建物がまずなければね。よりよい建物を造ることで、非常にいいものができる。そういう時代になりますね。

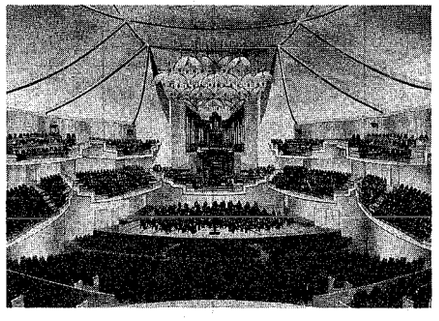
海外から取り入れ新潟で生みだす

司会　新しく新潟に三つの機能が違うホールができるわけで、市民もいろいろ期待しているようなんですが…。

團　いいものをやっていく、いろんなものを取り入れる。新潟が向いているロシア、中国、朝鮮半島、そしてヨーロッパ。そういう海外のいろんないものも取り入れると同時に、日本の、新潟で生まれるものも意識して。そこから、恒常的なものが育つのではないでしょうか。

司会　アリーナ型のコンサートホールについては…。

團　今は、ライトの使い方ですとか、いろいろな新しい方法で、いくらでも、何でもできるんじゃないでしょうか。例えば東京のサントリーホールのような、あんな完全なコンサートホールでも、大変特殊な形のオペラができる。それからオペラ座でも、コンサートができる。だから、そういうことは技術で克服できるものなんです。ただね、何かをやるには完全なんだ、というホールは造っておくべきです。これもあれもいいようにというようにすると、結局、学校の講堂みたいになっちゃう。だから、コンサートをやるのに完ぺきな形をつくれば、それを工夫していろいろな利用ができるわけです。



市民文化会館に入る1900席のアリーナ型のコンサートホール

團 伊玖磨（だん いくま）さん

大正13年、東京に生まれる。下総皖一に和声楽を学び、昭和20年東京音楽学校（現東京芸術大学）作曲科を卒業。作曲したオペラ「夕鶴」（木下順二台本）が、27年毎日音楽賞を受賞。創作オペラとしては空前の好評を得て、現在まで650回以上上演、欧米各地でも上演され好評を博した。

随筆家としては、「パイプのけむり」「続パイプのけむり」で、第19回読売文学賞（随筆・紀行）受賞。これまで22冊の「パイプのけむり」シリーズを発表。

日本藝術院会員。

新潟市民文化会館および周辺整備計画公開プロポーザルコンペティションで審査員として参加。

創造して新潟から発信

長谷川市長　　團 伊玖磨さん

（司会　大河内芳子　新潟市国際文化部長）

司会　文化の薫りのする新潟市にしていくために、先生の方から行政への提案とか、市民への提案などございましたら、お聞かせ願えますか。

團　そうですね。音楽というのは、創造と、それから再現である演奏と、鑑賞という、三つがあって、どれが欠けてもだめなんですね。作曲家がいくらいたって、演奏家がいなきゃものはできないし、音にならない。演奏家がいたって、作曲家がいないと何もできない。どっちが欠けても調子よくない。音楽を盛んになさろうと思ったら、創るということを念頭に置いてください。そうしないとね、海外のオーケストラを引っ張ってくるだけでは、繰り返しですよ、いつまでたっても。何か一種の浪費みたいな感じがするのね。そこで、モノを残していくというようにする。

これから先は、創造の発信ということを、ぜひ。新潟にはたくさんの民話もあれば、いろんなお祭りなどあるわけですから、県で言えば、「夕鶴」だとかもありますし。

市長　北原白秋の「砂山」、あれは新潟の歌なんですが、いまだに歌い継がれていますね。今、新潟の海岸で、毎夏「夕日コンサート」をしています。服部克久さんにおいでいただいて、もうすでに十年目になります。そこで「夕日の歌」というのを募集したんです。たくさんの作詞のご応募をいただきまして、それに曲をつけていただいて、歌ったんですけれども。

團　そういうものは、いいですね。そしてそのアルバムを作って、そしてそれを少し努力して、他の地方でも歌ってもらえるようにするとか。例えば夕日が美しいところは、全国まだまだあるわけですから、そことも連携して大きくすれば。

新潟の交響曲が欲しい

市長　ところで先生のご専門の分野になりますけど、私は何か新潟を代表する信濃川ですとか、雪とかの、交響曲や交響詩とかが欲しいなあって。

團　そうですね。僕は、前に九州でそういう作りましたよ。「筑後川」とか…。そのためにも、新潟出身の方で、音楽の分野、オペラやミュージカル、演劇などで、わりに全国的に指導的な力を持ってらっしゃる方を、もり立てることですね。こけら落としの交響曲を書いていただくというようなこともいいですね。

それから、音楽協会や演劇協会などがあると思いますが、そこに人が集まることが大事ですね。そしたら「こんなことがしたい」という意見が必ず出てきますね。案外知らないだけでいろんなグループがあるもんですよ。例えばオペラがやりたいという人が集っているとか、するもんですよ。

市長　市民ミュージカルなどはそうですね。

團　そうです。そういうのを、市が認知してあげるんですね。

市長　そういう方々を押し上げていく地道な努力が必要なんですね。

新潟市では、ジュニアオーケストラ教室というのがあって、児童や生徒の育成をしていて、もう十五年以上になります。そこの卒業生が、やっぱり音大に進む子が多いようですね。音楽の すそ野が広がっていく感じがしています。また、新潟に市民大茶会というのがありまして、全国で今一番大きくなっているんです。そういう野だてもできるいい場所になるなあと思ってるんです。ハコ（建物）を使うだけではなくて、周辺全体を使っていろんな文化活動が行われればね。そういう風に市民が楽しめる場所にしたいですね。

そしてハコの内部のつくりにもいろいろ工夫したいですね。

周辺を整備して市民が楽しめる場に

市長　私は、ホールに行かない人でも、楽しんで来られるような、そういう場所になるといいなと思っています。

團　場所もね、川があって、きれいで。町の中心だし。いい条件ですよ。

市長　ホールだけじゃなく、周り全体も公園として整備しまして、新潟中央公園という形で、自由に人が楽しめる場所にしたいなと思います。

芸術文化に参加される人もいますけれど、見るだけの人も聞くだけの人もいます。だから、周りの雰囲気といいますかね。信濃川の川辺ですし、弥彦山や角田山なんかが見えますし。全体を緑にし、車と交錯しないで散策できるようにしたいと思っています。桜の丘をはじめとして、四季折々に花が咲いたり、池が美しかったり…。

司会　例えば子ども連れの方のために、託児室も設けています。

市長　若いご夫婦が子どもを預けて音楽などを楽しむ生活スタイルも、市民文化会館では可能かなと思っています。

もう一つ大切なこととして、市民が自分たちが発表する場所としての活用ということを考えています。

團　市民の方には低廉でお貸しになればいいですね。それにそんなに毎日コンサートはできないですね、いくらなんだって見るほうや聴くほうにしても対応できないですよ。

市長　やっぱり練習に使ったり、サークルの発表会に使ったり…。

團　そういうことですね。そういうことも大事ですね。

市長　だんだん夢が膨らみますね。

團　建築がご専門の市長のお考えのもとで、市民の方も、そう思ってらっしゃるでしょうね。

港町新潟は文化の窓口に

司会　音楽を通じて、また文化という視点で、これから新潟の進んでいく方向というのは、どんなものなんだろうと、先生のお立場から。

團　例えば、国際化ということですね。あちこちで叫ばれるでしょう。それは言葉の問題じゃなくて、心の問題ですよね。音楽を通じて世界を見る、ということになれば、やはり音楽には国境がない。音楽が生まれてくることには、国境があるんですよ。でも演奏される、鑑賞されることには、国境はないんですよ。これは、美術でも何でも同じ。

ことに港町である新潟は、いいですよ。いい意味での国際的な先端を行っている。

市長　新潟の特色の一つに、日本海の対岸諸国への国際的な窓口になっていることがあるんですが。

團　ますます将来、ロシアや中国、朝鮮半島などが栄えて、新潟が大事になってくるんじゃないですかねぇ。

市長　文化という面では、いずれも文化大国ですよね。それも非常に活発で、レベルの高い…。

團　国際的な芸術の窓になられるといいですね。今、日本のオペラを今書いているんですから。練習もありますから準備をもう始めてるわけです。十年といったら、もう始めなきゃいけない。だれかに作曲を依頼しなきゃいけませんね。

市長　すぐにでも構想を練らなきゃなりませんね。

團　ええ、そうですよ。あっという間です。楽しみです。

平成10年秋に向けて

團　市民文化会館のこけら落としは、いつですか。

市長　平成十年の秋になります。

團　新国立劇場のすぐ後ですね。割にすぐじゃないですか。国立のこけら落とし

8月11日の日本海夕日コンサート（小針浜）

夕日の美しさを世界に発信。7万人が集まった